

文化・社会・政治的視点から見た自死に関する一考察

A Study involved in Suicide considered from cultural, social and political perspectives

和田 彩花 (Sayaka Wada) 指導：田中 英樹

1. 研究の背景

自死者数3万人越を記録した1998年から20年が経過した2018年現在、日本国内ではメディカル・モデルを中心とした様々な自死予防対策が日本全国で行われてきた。自死予防研究が進み、国内の自死者数が着実に減少している一方で、自死遺族や自死者に対する差別は依然として根強い。

2. 研究の目的

本研究の目的は、なぜそもそも社会で自死予防対策をしなければいけないのか、の根本を問うことである。一般市民が専門家と同じように自死差別問題を自分ごとのように考える必要がある。そのため、自死差別が起きた背景を辿る。

3. 研究の方法

本研究では、CiNiiを用いて自死に関する数個のキーワードをもとに文献検索を行った。タイトルに「自殺」「自死」「切腹」「情死」「心中」「自刃」とある本を中心に集めた。収集した文献に記述されている、日本における自死の記述のされ方や社会の自死に対するイメージの変遷を種類ごとに分類し、カテゴリー化した。

4. 結果と考察

4.1. 専門家と一般市民にある考え方のギャップ

専門家の中では、自死は「追い詰められた死」「社会的他殺」「防げる死」とあるという認識が定着してきた。一方、一般市民にとって自死は「異常死」であり、「弱い人間がする身勝手な死」である。自死に対するマイナスなイメージは、自死者への差別に繋がる。誰かが賃貸物件の中で自ら命を絶った場合、その物件は「ワケあり物件」とみなされ、価値が下がってしまう。そのため、物件の修繕やお祓い代を家主は自死遺族に「損害賠償」として請求する。また、企業や学校内で誰かが自死した場合、その原因追求は疎まれ、隠蔽されてしまいやすい。

4.2. 日本と世界における自死の捉え方の違い

欧米諸国における価値観の基盤はキリスト教やユダヤ教にある。キリスト教やユダヤ教では、自死は罪とみなされる。一方、仏教や儒教に馴染み深い日本では、自死が罪という認識が歴史上で存在しなかった。そのため、「告白を

もって罪は赦される」と考えるキリスト教・ユダヤ教に比べ、日本人は「罪や間違いは死をもって償われるべきである」と考える傾向にある。また、日本独自の武士文化は、切腹が自己陶醉のパフォーマンスであるというイメージを残した。死に執着するよりも、潔く自らの命を捨てることを美化した時代は、欧米の人にとっては理解しがたいが、日本人にとっては容易に受け入れられてしまう思想である。

4.3. 日本人が自死を差別する背景

日本には時代を超えて、①恩を仇で返すことを許さない家族主義、②生と死の境界線を曖昧にする死生観、③死をもって償うことを許す社会構造が存在する。①恩を仇で返すことを許さない家族主義では、自死者と繋がりが深い人やコミュニティがその人の自死を防げなかったことへの「恥」の念を抱いてしまう。②生と死の境界線を曖昧にする死生観は、自死遺族差別の代表とも言える心理的瑕疵物件問題を引き起こし、自死遺族への「恥」のレッテルを貼る。そして③死をもって償うことを許す社会構造は、そもそも「恥」払拭のための死である切腹に由来する。自死差別背景には、日本人の集団主義思想、死を恐れる神道の思想や土着信仰、自死を美化した武士道精神や神風特攻隊の歴史が存在する。

4.4. 自死予防対策を社会で行う意義

罪を価値観の基盤とした国々では、法や制度、また、道徳観によって、自死を予防することができる。一方、日本では、もともと道徳的規範となる明確な教典や価値観が存在しないため、自死は是か非かを討論しても答えの出しようがない。日本人の脆い道徳観は、結果として自死遺族や自死者への差別的な考えにつながっていつてしまう。日本人の価値観が多様に変化している現在、日本社会において自死予防対策をする意義を一つに定め、その価値に基づいて法を定めたり日本人の価値観を形成していくのは非常に難しい。今後、西洋の思想からの精神的自立を目指しながら、日本人としてどう自国民を守っていくのかを社会全体で考えなければならない。そして、自死者や自死遺族への差別のない国を作っていくべきである。